2009 March VOL.7

こうちミュージアムネットワーク通信

目次 CONTENTS

●土佐の文化財「蒔絵船形弁当」・・・・・・・・・・・P1
●随想「NHK大河ドラマ〈龍馬伝〉余話」・・・・・P2
●文化の言葉「体験学習」・・・・・・・・・・・・・・P2
●会員紹介「中土佐町立美術館」「佐川町立青山文庫」・P3
「高知県立足摺海洋館」「高知市立龍馬の生まれたまち記念館」
●活動報告「ボイストレーニング　グループレッスン」P4
●時の話題「ゆるキャラブーム」・・・・・・・・・・・P4
●コラム「出前授業」・・・・・・・・・・・・・・・・・P5
●現場通信「休・廃校活性化プロジェクト」・・・・・P6
●展示会批評「ターシャ・テューダー展」・・・・・・P7
●図書の窓「先生と司書が選んだ　調べるための本」・P7
●情報コーナー／会員一覧・・・・・・・・・・・・・・P8

土佐の文化財

◀江戸時代（中期～後期）の蒔絵船形弁当
安芸市保護有形文化財
安芸市立歴史民俗資料館所蔵

◆蒔絵船形弁当（まきえふながたべんとう）

桜、ツツジ、藤と花の美しい季節を迎えました。安芸市内にある内原野公園は、江戸時代、土佐藩家老五藤家が開いた公園で、今もツツジの名所として知られています。ここには五藤家だけでなく、藩主やその一族も何度か訪れています。なかでも、嘉永五年（一八五二）三月、十二代藩主豊資（とよすけ）が隠居後、安芸を訪れた際にも、内原野へ出かけました。この時、いろいろな種類のお弁当を持っていったことが、献立とともに記録（五藤家文書）に残っています。

写真は、いつの頃かわかりませんが、藩主山内侯が安芸を訪れた際に、内原野の延寿亭（えんじゅてい）での宴のために作ったと伝えられる、変わり型の提重（さげじゅう）です。大名の屋形船をかたどったもので、屋形の「寿」の文字と重箱に描かれた七福神の蒔絵などから宝船を暗示しています。船底には船形の酒注、屋形には三段重箱、台座の引き出しには杯と銘々皿をそれぞれ納めています。重箱や酒注に描かれた文様から、近世の円熟した蒔絵がうかがえます。さらに、船首や船尾など各所に金銅製飾金具を打ち、五藤家の漆器のなかでも最も豪華な作品です。

（安芸市立歴史民俗資料館　門田由紀）

随想

NHK大河ドラマ「龍馬伝」余話

～日本国中〝龍馬の風〟が～

県立坂本龍馬記念館
館長　森　健志郎

気ぜわしい日々が過ぎていく。このところその気ぜわしさにさらに拍車がかってきた。原因ははっきりしている。ご想像通り「龍馬伝」。来年のNHK大河ドラマだ。ここに来てその影響力というか〝威力〟に改めて感心している。

龍馬記念館の学芸員は連日、〝ご本家〟NHKさんとのやり取りに追われている。「この史実は間違いないか」「もう一度確認して欲しい」電話の問い合わせは当たり前で、最近では日常的になっている。だから、彼はいつも宿題を抱えている状態だ。電話で話のつかぬ時には、一直線の東京行きとなる。「ちょっと帰りに図書館へ寄って、調べものがありますので」と一足お先の退社することも珍しくなくなった。

こんなことも。外出先から戻った彼が、息を弾ませ汗を拭いていた。聞くと「筆山に行っていました」。呼吸を整えながら話した彼の説明によれば、ドラマ登場人物の「家紋」調べに筆山へ行ったという。「なぜ筆山？」筆山は霊園、つまりお墓。墓石に彫り込んである「家紋」を写真に撮りに行ったわけだ。他家の墓石にまとわり付いて写真を撮る彼の姿を想像して笑ってしまった。

龍馬の辿った足跡地からと言えば、特に長崎県からのアプローチは尋常ではない。県庁、市役所、観光系行政の取り組む姿勢は受話器の向こうからびんびん伝わってくる。ただならぬ様子が窺える。ここ半年の間ですっかりなじみになった長崎市役所の職員さんさえいる。総じて龍馬の資料関係に関する問い合わせが多い。中でも龍馬立位像写真、龍馬の手紙、龍馬が使ったと同型のピストル、紋服・・・などポジフィルムの貸し出し注文がこれも毎日のようにある。先日は「海援隊約規」の複製を製作したいとの申し出もあった。「龍馬伝」を機に日本最初の商社「亀山社中」を行政がリニューアルした。内部を資料館にしてそこに展示するという。龍馬ファンには必見の史跡となるはずである。

そうした勢いは何も行政ばかりではなく、民間も活発である。出版界、酒造メーカー、お菓子屋さん、お土産屋さん。雑誌の特集、観光案内冊子からパンフレット、お酒のラベル、お菓子の包装紙と引きも切らない。「龍馬の写真をパロディー化して使ってはいけませんか」そんなお問い合わせまであって「それだけは勘弁してください」丁寧にお断りした。篤姫効果ですっかりイメージアップした鹿児島は、余韻の消えぬ内に〝龍馬で再び〟と龍馬大歓迎。熊本でも龍馬の師、横井小南で〝関係あり〟とやっぱり手ぐすね引いている。

皆さんそれぞれの思惑で「龍馬伝」を待っている。関係県が、地域がそして人々が、龍馬に元気をもらおうと待っている。それがやはり龍馬は全国区と言わしめるゆえんだと思う。

最近、龍馬記念館の入館者アンケートに「龍馬伝」に関係するものが目立って多くなってきた。「来年ドラマが楽しみです」と皆さん口を揃える。「龍馬伝が始まったら、また、ここに来ます」約束している若者もいる。約束の相手は当然〝龍馬サン〟にほかならない。

『押入れから引っ張り出して、もう一度「竜馬がゆく」を読んでみようと思う』『遅ればせながら折角の機会だ「竜馬がゆく」を読む』

にわかに司馬遼太郎の「竜馬がゆく」が注目されている。龍馬ファンには「竜馬がゆく」はバイブルに近い。今回「龍馬伝」は原作なし。そこが心配だが、シナリオ執筆中の福田靖さんは、先の高知で開かれた講演で「これまでの龍馬にさらに新たな魅力を加える」と自信のほどを語った。現代ヒーロー創りは日本一の腕前と言われる福田さんである。

来年は日本国中、必ず〝龍馬の風〟が吹く。

文化の言葉

体験学習

各地の博物館では、教育普及の一環として体験学習を取り上げ、出前授業などが実施されている。このような傾向は、指定管理者制度が導入されたころより増加しているように思われる。

昭和三十～四十年代の小・中学校では、体験学習などはなかったと記憶している。時代が違うといえばそれまでであろうが。体験的な学習は、技術の時間に養護学級の生徒さんと楽しく団扇などを製作する授業があった。苦労したのでよく覚えている。現在、昔の遊びを授業の中で教えている学校もある。社会の大きな変化という波が子ども達の世界にも押し寄せてきたのだ。

十五年ほど前、ある都市部の学芸員が今の若い学芸員さんは、「なにも知らない人が多いですよ」とこぼしていた。博物館のなかった頃、どのようにして学んでいたのだろうか。まだ、村の鍛冶屋さんや魚屋さん、鶏を解体して肉を販売する方などが身近にいた。子ども達は、遊びながら、時間を忘れ不思議な光景に見とれていた。見るだけではない、大人達は仕事をしながら色々なことを教えてくれたのである。今考えると毎日が体験学習であった。蔵の中の道具、野・山の植物、動物などとの出会いを通して自然と学んでいった。一歩外に出るとそこは博物館でもあったのだ。そう思うと博物館の役割は、大きいのだ。

（高知県立歴史民俗資料館　岡本桂典）

会員紹介

中土佐町立美術館

中土佐町立美術館は、平成元年、中土佐町矢井賀出身の会社社長、故・町田菊一氏の「絵画を通し、町民の文化意識を高めたい」との篤志により、県下初の町立美術館として設立されました。六五〇点を越す美術品のほとんどは、町田氏の寄贈によるものです。山本芳翠、黒田清輝など、近代日本画壇に足跡を残す画家から、竹久夢二、棟方志功の版画、県内出身の奥谷博、石川寅治など、幅広い作品を所蔵しています。とりわけ、フランス風西洋画のさきがけ、山本芳翠の「洋美人」は、館の目玉であり、日本美術史を通しても貴重な作品と言えるでしょう。小さな美術館ですが、作品の入れ替えを三ヵ月ごとにおこなっており、訪れるたびに新たな絵画の魅力を発見していただけると思います。高知県名誉県民である司馬遼太郎が館名を揮毫、木造平屋建てで、日本瓦に土佐漆喰、白壁土蔵造りの建物です。

久礼にお越しの際は、ぜひお立ち寄り下さい。

（中土佐町立美術館　嶋　史子）

佐川町立青山（せいざん）文庫

佐川町立青山文庫の「青山」は元宮内大臣の田中光顕の雅号です。幕末の生き証人である光顕の収集した、坂本龍馬・中岡慎太郎・武市半平太など幕末維新の志士の書状や書画を所蔵しています。また日本の植物学の草分けである牧野富太郎、ブラジル移民事業の草分けである水野龍、土佐藩筆頭家老である佐川深尾家の史料など一万三千点を所蔵しています。その他、西谷文庫として、『解体新書』（初版）や『セルボーンの博物誌』関連史料一万点があります。現在の常設展では、白装束の龍馬が夢枕に立った昭憲皇太后の「蒔絵文箱」、古代に信仰されていた神獣を描いた全幅三・六ｍの華麗な「四神図」を展示中です。

青山文庫に至る経路には、幕府の巡検使の宿であった国指定の重要文化財「竹村家住宅」があります。同家を主なルーツとする司牡丹酒造は淡麗辛口の土佐を代表する銘酒を製造しています。江戸期から現在に至るまで様々な時期の白壁の蔵が所狭しと立ち並び、佐川の街のこれまでの歴史を感じることができます。近隣には、深尾氏の菩提寺である臨済宗妙心寺派の青源寺があり、その境内の庭園は同町内にある真言宗の乗台寺、高知市の竹林寺とともに、土佐の三名園とされています。

（佐川町立青山文庫　片岡　健）

高知県立足摺海洋館

昭和四十七年十一月、足摺宇和海国定公園が国立公園に昇格するとともに、足摺海中公園が竜串海中公園と名称を変更し、自然公園法に基づく博物展示施設として事業承認を受け「海洋に関する知識を普及し、併せて健全な余暇活動に寄与する」ことを目的に、高知県立足摺海洋館は昭和五十年五月二日に開館し、「土佐の海と黒潮の魚たち」をメインテーマに、土佐清水市及び大月町の黒潮が迫る沿岸海域を泳ぐ魚類から磯の潮だまりに棲む無脊椎動物等、約二四〇種二、四〇〇点余りの飼育展示をしている。

社会教育を目的に設置された施設ではあるが、高知県西部地区（足摺・竜串・四万十・柏島地区）の中核となる観光施設としての役割を担っている。

小中学生を対象とした飼育体験学習や教育面に配慮した催しを実施するなど、海洋に関する知識の普及に努め、希少価値の高い生物の展示や、年三～四回特色のある特別展等を実施し、楽しめる水族館としての充実を図るとともに、海洋をテーマにした観光の一躍を担う。

（高知県立足摺海洋館　事務主任　福田健雄）

高知市立龍馬の生まれたまち記念館

龍馬の生まれたまち記念館は観光・文化の推進を目指し、平成十六年三月にオープンしました。展示館では龍馬が育った時代の町並みや人々を模型やパネル・映像装置で紹介しています。残念ながら現物の資料はほとんどありませんが、幕末の日本を動かした龍馬が生まれ育ち、人間形成の土壌となったこの地に実際に立ち寄られたお客様に、それぞれの思いを馳せて頂くお手伝いが出来たら嬉しく思います。

また毎日午前九時～午後五時まで土佐観光ガイドボランティア協会会員さんが二名常駐して下さり、お客様のご希望に合わせて館内と周辺史跡のガイドを実施しております。記念館周辺には龍馬に関係するたくさんの史跡が残っています。目で展示パネルを見るだけではなく、耳で解説を聞きながら、実際に歩いて史跡を辿って頂くと、より一層龍馬を身近に肌で感じられるのではないでしょうか。

来年は「龍馬伝」の放送も決定しております。より多くのお客様にご来館頂き、満足してお帰り頂けるよう、職員一同一生懸命取り組んでいきたいと考えております。

（高知市立龍馬の生まれたまち記念館　学芸員　上野麻衣）

活動報告

ボイストレーニング グループレッスン

平成二十年四月十二日（土）、「発声の会」代表の金澤博氏をお招きし、自由民権記念館で「ボイストレーニング」を体験しました。

前半は、金澤氏のこれまでの歩みと、発声における腹式呼吸（横隔膜呼吸）の有用性についてのお話をお聞きしました。

小学生の頃、先生に褒められたことがきっかけで音楽の道を志されたこと、大学で教えられた「伝統的な」呼吸法による発声に違和感と疑問を抱き、ミュージカルを自己の表現の場として選ばれ、大変な苦労ののちデビューされたこと。また、独自に開発されたレッスン法や人間の骨格にはじまる理論的なお話も、金澤氏の明朗なお人柄もあって、楽しくわかりやすく学ぶことができました。

後半は、実際に身体を動かしてのレッスンです。

わかりやすく相手に届く声、響く声を出すためには、その身体作りが大切とのこと。まずは、身体のゆがみを指摘され、姿勢矯正の必要性を痛感しました。その後、みんなで柔軟体操を行い、なんとマッサージの仕方まで学びました。継続こそ力なりで、続けることが重要。発声のためだけではなく、肩こりも解消されて身体の調子も良くなるので、一石二鳥です。

身体があたたまった後は、円になり「見えない玉」を使ってのゲーム。お互いに遠慮をしながらのスタートで、スムーズにキャッチできない場面もありましたが、身体だけでなく心までほぐれて、楽しみながら進めることができました。

最後は、金澤氏のピアノ伴奏により、みんなで歌いました。学んだとおり、歌うときの息は鼻から吸うのではなく、口から吸い込み口から吐き出す。息継ぎの音がしないように、無意識のことを意識しながら行う。そして、何よりも大切なのは「笑顔」。

何度も何度もそのように指摘されながら、はじめ恥ずかしくしていた参加者も、笑顔で歌い終えました。

今回は、発声について、理論的にも実践的にも学ぶことができました。この研修会後、解説員の声がよく通るようになったとの報告も受けています。良い声につながるという、笑顔、姿勢は、接客の基本でもあります。今後も、無意識なことを「意識」することで、よりよい対応を心がけたいと思います。

（高知県立文学館　森香奈子）

二十年度の活動報告

平成二十年度から会長は宅間一之（高知県立歴史民俗資料館長）になりました。

【企画調整部会】
- 会報誌7号編集
- 高知県内資料の保存と継承についての検討会
- 「龍馬伝」関連アンケート

【研修企画部会】
- 研修会「ボイストレーニング研修」講師：金澤博氏（4月12日）
- 四国ミュージアム研究会との合同シンポジウム開催（2月22日）
- 施設企画展見学会
  高知県立牧野植物園
  「五台山花絵巻」（6月27日）
  高知市春野郷土資料館
  「昔のしごと資料館」＋ミニトーク
  「民具展示を考える」
  同館　徳平晶
  県歴民　梅野光興（1月21日）

【教育普及部会】
- 「こうちミュージアムネットワーク専門的職員リスト2008」作成
- 会員館の教育普及活動についてのアンケート調査、広報
- ホームページの更新

【新入会員】
- 高知市立龍馬の生まれたまち記念館、佐川町立青山文庫

【その他】
- 2010年NHK大河ドラマ「龍馬伝」対策検討会
- 公共交通を使って子どもたちをミュージアムへ誘う企画

時の話題

ゆるキャラブーム

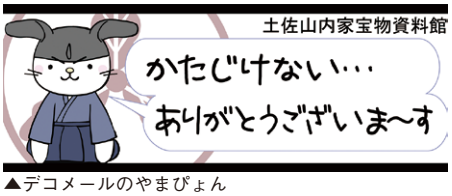
昨今、巷では「ゆるキャラブーム」なる現象が時々話題にのぼっています。

「ゆるキャラ」とは、簡単に定義すればゆる～いご当地キャラクターのこと。ブームの火付け役と言える彦根の「ひこにゃん」に始まり、物議を醸した「せんとくん」の登場と、数々のキャラが誕生しています。そしてそのゆるさの幅も、癒し系からキモカワ系まで千差万別。ブームに乗って図鑑が刊行されたり、携帯電話のデコメールにお目見え、果てにはきぐるみサミットまで開催されて、去年はかなりの盛り上がりを見せました。

このブームに乗って、山内資料館のキャラクター「やまぴょん」は、高知のゆるキャラとして図鑑やデコメール・プリクラなどにもぐりこんで活動しています。これはやまぴょんがひこにゃん亜種（！）の武将系ゆるキャラであるからに他ならないのですが、プロに頼むでもなく職員の落書きをそのまま採用して、これが公式キャラクターなのかどうかもビミョウという、なにもかもゆる～い所がまさに「ゆるキャラ」なのかもしれません。

そんなやまぴょん、目下調子に乗って着ぐるみをつくったところで、長い耳が邪魔で資料館内に入れないというゆる～いジレンマに陥っております。誰が着るのか、も問題ですが。

（土佐山内家宝物資料館　藤田雅子）



▲デコメールのやまぴょん

コラム 出前授業

「自由民権運動」

高知市立自由民権記念館　宮崎篤子

いま、学校の歴史の授業では自由民権運動も学ぶ。そのこともあって当館の出前授業のテーマは「自由民権運動」となることがほとんどだが、内容についてはまだまだ模索中である。

実際の子どもたちとのやり取りでは、本題に入る前に博物館の仕組みや、高知にも色々なテーマの博物館があることを簡単に説明している。「水族館も美術館も植物園も博物館！」と言うと驚かれるが、印象に残るらしい。同時に図書館との違いについても説明することもある。図書館や博物館の利用の仕方がわかると応用がきくからである。

これらの事業の効果は見えにくいが、幸いに？当館では「社会科自由研究作品展」という事業を行っている。今年で九回目だが、子どもたちは展示作品を見るだけでも刺激を受けているし、自分の作品が展示されることでモチベーションが上がるようだ。各館で行われているイベントや出前授業がきっかけで取り組まれたものもある。子どもたちの作品からは学びのプロセスや成長が見える。出前授業もこのような事業との組み合わせで展開し、良い学びの循環を生みだしたい。

「出前考古学教室」

高知県埋蔵文化財センター
主任調査員　筒井三菜

私たちの住む高知県の大地にも、歴史を作ってきた古代の人々の生活の跡が遺跡として数多く残っています。高知県埋蔵文化財センターでは歴史学習や体験学習を通して、身近な地域の歴史や埋蔵文化財をもっと身近に感じてもらいたいと、平成十一年度から「出前考古学教室」と銘打って県内の小・中学校に出向き

1. 考古学と地域の遺跡の話
2. 高知県から出土した土器や石器の遺物展示
3. 火起こしや勾玉づくりの体験学習

を行っています。

年間約五〇校を訪問していますが、実際の調査で見つかった土器や石器を目にし、触れることで、古代の人々の技術や道具・生活の移り変わりを知ることができ、子供たちにとっては貴重な体験になったようです。

また火起こしはやってみると意外と難しく、なかなか火がつかないこともありますが、子ども達はあきらめず、何度も夢中になって挑戦しています。

このような事業を通して、私たちの郷土の歴史や文化の大切さを将来の歴史・文化の担い手である子どもたちに、感じてもらえればと思います。

「アニマルランド」

わんぱーくこうち　山崎博継

アニマルランドでは、平成十九年度より出前授業を始め、高知市内の小学校を対象として行っています。評判が良いのか、たくさんの注文を頂き本当にありがとうございます。

当園の出前授業は十一種類のメニューを準備しており、パワーポイント（静止画）を使った解説が中心であり、メニューによってポスターや標本等を使って授業を進めます。希望の内容を各団体の代表者の方に選んでいただく形式をとっていますが、同じメニューでも学年に応じて内容を変更して行っていますので、全学年ですべてのメニューが使えます。

その中で最も依頼が多いのは根強い人気の「カブトムシとクワガタムシの不思議」です。外国産の種類などを納めた標本箱や、生きた虫を見る子供たちはいつも大興奮で、解説後の質問時間がなかなか終わらないような状態です。その他、骨格標本を使ったメニューなど動物園ならではの内容で楽しんでいただいています。

アニマルランドの出前授業は、身近な環境への関心と動物への理解を深めていただくことを目的に行っていますが、各々の内容を通じて動物園の存在意義を考えていただければ、ありがたいです。

高知空襲の「語り部」事業

平和資料館・草の家　館長　岡村正弘

丁度十年程前、西森茂夫初代館長に高知空襲の「語り部」をしてくれないかと頼まれたのがきっかけで、もう百回以上、小学校や中学校などへ体験を話しに行っています。

私は昭和十二年四月生まれで、高知空襲の時は小学校二年生でした。家は掛川町で酒屋の次男坊でした。

真夜中に空襲警報で起こされ、近くの大きな共同防空壕に母と妹と三人で逃げました。中にはすでにたくさんの人が避難してきていましたがもぐりこみました。あとからいっぱいの人が入ってきました。満員の防空壕の中でじっと我慢していましたが、蒸し暑くて息がしにくくなって、「ここにおらないかん」という母の手を振り切って外に出たのが生死の分かれ目になりました。後で壕を掘り出して出てきた変わり果てた母の姿を忘れることが出来ません。以来五十年あまり、思い出すと涙が出て人に話したくありませんでした。十年話し続けてやっと心的障害を乗り越えて話せるようになりました。

休・廃校活性化プロジェクト in 布 2009

現場通信

最近、廃校を福祉施設や宿泊施設に再活用する事例や会場として利用するイベントが増えている。高知県立美術館でも、平成十九年度より土佐清水市布の休校中の布中学校を会場にした様々な取り組みを通して、地域の活性化を考える「休・廃校活性化プロジェクト」（以下「廃プロ」）を行っている。二年目の今年度は、県立美術館以外に、歴史民俗資料館、坂本龍馬記念館、文学館、埋蔵文化財センターの、高知県文化財団が管理運営を行っている県立文化施設五館が協力して、事業を行った。意外にも、財団の施設のみが一緒にひとつの事業を行ったのはこれが初めてである。

各館は、普段から行っている普及事業をもとにイベントを考え、準備をすすめていった。県立歴史民俗資料館の「よろい・かぶとを身につけて城主になってみよう！」、県立埋蔵文化財センターの「古代人体験」（火おこし体験・勾玉作り）、県立文学館の「おはなしキャラバン」などは、館内外で実施している普及事業をもとにしたイベントである。一方、県立龍馬記念館の「一人芝居と紙芝居」（兵庫龍馬会会長の楠本剛氏熱演！）のように、低学年向け学習教材として作成した紙芝居の〝お披露目〟となったものもある。県立美術館は美術だけでなく、芸術全般の発信に努めている姿勢から、移動美術館やワークショップの他、地元の中村交響楽団によるクラシック・コンサートも実施し、好評を博した。

近年は、博物館内外での普及事業も盛んになり、各館が工夫して事業を行っているが、それらを廃プロで実施することで、より幅広い展開へつながった点もあった。例えば、埋蔵文化財センターによる「火おこし体験・勾玉作り」は廃プロ当日も子どもたちに人気が高かったが、その様子を見た保護者から依頼があり、新年早々再び、布小学校での出前講座実施につながった。他にも、地元のジョン万次郎の会より、一人芝居の上演希望の声が龍馬記念館に寄せられている、と聞く。文学館にも「おはなしキャラバン」の依頼があったそうだ。学校での出前講座は、各館が内容を工夫して行っていると思うが、このような機会に、実際に見学したり、参加することで関心を持ってくださった方が、「うちでも」「もう一回」とつながっていったことは、嬉しい効果である。各館のイベントは、様々な文化施設を知り、体験する機会になるが、一過性のものとなる可能性もはらんでいる。二日間のイベントが、ただ〝思い出〟で終わってしまわないか、と考えたこともあるので、少しずつでも広がりがでてきたのは嬉しい。地域文化の見直しや活用を考える機会につながるとさらに嬉しい。

原則として一地域での美術館主催の「廃プロ」開催は三年。公的機関として一地域だけに限定することは難しいからである。よって、二十一年度が布中での開催最後の年となる。しかし、四年目以降は関係ない、とは思わない。むしろ、地域文化の活用のための協力をする関係を築きたいと思う。二十一年度は、地域にとっては当たり前のようなもの（歴史、芸能、自然など）、気がつかなかったもの（人材、資源）の再発見と活用を、地域と一緒に考えていく事業を展開し、〝アフター廃プロ〟につなげていきたいと思っている。そのためには、地域で一緒に事業に取り組んでくれる組織をつくりあげることも不可欠だ。布での廃プロでは、十八年度の県立美術館の企画「市民とつくる展覧会」に参加した濱田竜也さんが中心となって、布地区住民に声をかけ、新しい動きに繋げようと努力してくれている。

県立文化施設にとって、廃プロは「県内各地に等しく文化サービスを提供する」という意図もある。しかし、イベントを実施するだけでは、実施後の寂しさを、かえって倍増させてしまうかもしれない。私たちが芸術文化の楽しさを伝えるとともに、〝地域文化の発見と活用〟を考え、住民が地域に誇りをもち、連帯感ある地域づくりにつなげるお手伝いをすることが「文化の力での地域活性化」でないだろうか。

廃校が博物館やアート関連施設として復活した事例は多い。これから先、全国的に廃校舎が増えるのは必至である。「廃校をどうするか」は自治体や地域住民がこれから検討してほしい問題であるが、せめて廃校舎の再活用を考えるときに、「ミュージアム」という案も浮かんでくれるようになればいいなあ、と思っている。

（高知県立美術館　企画事業課　河村章代）

展示会批評　高知県立文学館

「ターシャ・テューダー展」を観て

美術館には数多くのポスターやチラシ、DMが送られてきますが、近年、県立文学館のものがとても素敵で、いったい誰のデザインだろうと問い合わせてみると、広報担当のスタッフの方のデザインだとわかり、驚きました。

県立文学館では、二〇〇八年冬の展覧会として「ターシャ・テューダー展」を開催していました。B4サイズの二ツ折りのチラシも大変魅力的で、チラシを見ただけで行きたくなるようなデザインと構成で作られています。関連企画も充実しており、また見やすく、解りやすい記述になっています。

私もこの企画は観せていただきたいと思い、チラシに付いていた割引券を使って入館させてもらいました。この割引券もお得な感じがして良いと思いました。

会場に入ると、コーギーコテージの建物の玄関付近を模したスペースがありました。入口の木製のドア、白い窓の木枠、壁には造園道具が掛けられており、その手前には沢山の花々（造花）が咲いており、来館者が記念撮影できるスペースになっていました。私も早速受付の方にたのんでデジカメのシャッターを押してもらい、嬉しくなりました。

会場の中に進むと、ターシャ・テューダーさんの愛用したドレス、食器や台所用品、毛糸をつむぐ糸車などの生活感あふれる雑貨、手作りの操り人形、直筆のイラストなどが並んでいました。メインの『コーギービルのいちばん楽しい日』の全原画四十二点は見ごたえがありました。

展示内容は、テューダーさんのライフスタイルの魅力を伝えるのには十分だったと思いますが、コーギーコテージの雰囲気を楽しむには、もう少しゆったりした展示スペースが必要だったのではないかと思いました。もちろん、展示室自体の広さは変えようがないとは思いますが、一階・二階の受付付近（階段も含む）の空間の使い方で、もう少しゆったり感が出せるのではないかと思いました。

この企画担当者にお話をお伺いすると、「絵本作家として人気の高いテューダーさんの展覧会開催により、来館者の層を広げたい。」とおっしゃっていましたが、平均二百人／日を越す入館者とお聞きし、さらにクリスマス前の多数の関連企画で、多くの来館者でにぎわい、目標は充分達成された事でしょう。他館の企画ながら、とても嬉しい気持ちになりました。

（香美市立美術館　北泰子）

図書の窓

この本の執筆者は小・中学校社会科の先生と学校図書館の司書の方々で、基本的には先生と学校図書館の司書のための本である。

「子どもたちに学校図書館で調べ学習をさせたい」という思いを持つ先生がいても、学校図書館がそれに応えられる蔵書を備えていなければ不可能になる。そこで、先生と司書が一緒になって、それぞれの視点から参考になる本を持ち寄り、精査して紹介したものである。

単元に合わせて、「はじめて手にとる一冊」「次に手にとるなら」と段階を追って紹介している。例えば、明治維新期だったら、まず「新しい日本の国づくりを調べよう」と大きなテーマがある。そして十個の学習のキーワードが設定されており、「開国」や「坂本龍馬」などが並んでいる。これらのキーワードについて詳しく調べることができる本が紹介されているが、一流の研究者が監修した子ども向けの本ばかりで信頼できる。また、本だけでは解決できなかった時のために、龍馬記念館や自由民権記念館など博物館のホームページも紹介されている。

編・著者の一人である小学校司書・中山氏は「百聞は一見にしかず。本にあることを〈モノ〉で確かめる。〈モノ〉を見て、体験して、〈情報〉を確かめる。その往復があってこそ、知識は豊かに、確かなものになっていく。」と記しており、博物館と学校の繋がりの重要性も説かれている。こういう視点でまとめられている本なので、博物館職員にとっても大いに参考になる。

理想としては、こういう図書を参考にしながら、小さい地域でも構わないので、先生・司書・博物館職員が一緒になって子どもたちの学習について考える場を持ち、博物館が学校教育に協力していけたら良いと思う。

（高知県立坂本龍馬記念館　三浦夏樹）

〈先生と司書が選んだ　調べるための本〉
― 小学校社会科で活用できる学校図書館コレクション ―

鎌田和宏・中山美由紀　編・著
少年写真新聞社刊／二、三一〇円

情報コーナー IMFORMATION

◆展示会◆

【香美市立美術館】
- 杉浦康益　陶の花たち展
  4月5日(日)～5月10日(日)

【高知市春野郷土資料館】
- 西分増井遺跡群
  8月2日(日)～9月17日(木)

【中岡慎太郎館】
- 北川村　ふるさと写真館
  ―昭和30～40年代の風景―
  4月29日(水)～6月29日(月)
- 中岡慎太郎はどんな人？
  8月1日(土)～9月30日(水)

【佐川町立青山文庫】
- 常設展コーナー展示
  「佐川町出身の幕末・近代の偉人たち」
  3月25日(水)～
- 特設展「文教のまち佐川　学びの系譜
  ―幕末から明治期の―」
  開催中～12月27日(日)

【高知県立美術館】
- 福岡アジア美術館コレクション
  夢みるアジア
  ―アジアの伝統的大衆芸術と現代美術―
  5月17日(日)～7月12日(日)
- KITTY EX.(キティ・エックス)
  7月19日(日)～9月27日(日)
- 日本のわざと美
  ―重要無形文化財とそれを支える人々―
  10月31日(土)～11月29日(日)
- 蜷川実花展　―地上の花、天上の色―
  12月6日(日)～3月7日(日)

【横山隆一記念まんが館】
- 横山隆一生誕100年記念
  大フクちゃん展
  5月17日(日)～8月30日(日)
- 「きんこん土佐日記」
  「がじゅまるファミリー」5周年記念
  村岡マサヒロ・ももココロ二人展
  9月19日(土)～11月29日(日)

【高知市立自由民権記念館】
- 土佐の歴史玉手箱
  ―近森重治氏コレクションより―
  4月25日(土)～5月31日(日)
- 澤田正二郎展
  10月10日(土)～11月23日(月)

【土佐山内家宝物資料館】
- 山内家の兜
  3月7日(土)～5月11日(月)

【高知県立歴史民俗資料館】
- 兜　―もののふの美意識―
  4月24日(金)～6月21日(日)
- 復元！からくりの世界
  8月1日(土)～31日(月)

【高知県立牧野植物園】
- 植物からの贈りものシリーズ第4回
  「酒と植物―草木からできる魅惑の飲みもの―」
  2008年12月6日(土)～5月10日(日)
- セツローさんの草花スケッチ
  6月6日(土)～6月28日(日)

【高知県立埋蔵文化財センター】
- 考古資料からみた高知県の歴史
  4月21日(火)～7月10日(金)
- 続・発掘へんろ
  ―遺跡にみる四国のすがた―
  7月27日(月)～9月18日(金)

【香美市立やなせたかし記念館・詩とメルヘン絵本館】
- やなせたかし90年のあゆみ展
  2月18日(水)～5月11日(月)
- 横山隆一　まんが絵本原画展
  5月13日(水)～7月13日(月)

【高知県立文学館】
- 大町桂月
  ―酒と旅と自然を愛した文人展―
  4月11日(土)～5月5日(火・祝日)
- 瀬戸内寂聴の世界
  5月12日(火)～6月21日(日)
- リサとガスパール&ペネロペ展
  7月4日(土)～8月31日(月)

【高知県立図書館】
- 高知市上町周辺の龍馬関係史跡・幕末維新期の偉人銅像マップ(高知県内)
  (大河ドラマ「龍馬伝」関連企画)
  4月～6月
- 土佐の人物傳「塩見俊二」
  3月28日(土)～5月28日(木)

【横倉山自然の森博物館】
- 吉岡郷継写真展「鳥形山系の花たち」
  3月28日(土)～6月7日(日)
- 土佐の貝　―その美と魅力―
  7月18日(土)～9月6日(日)

ホームページアドレス　http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/network/konet_home.html

会員一覧

※20年度幹事館

入会を希望される方は事務局
県文化財団　TEL088-866-8013まで

安芸市立書道美術館
安芸市立歴史民俗資料館※
いの町紙の博物館
いの町立吾北中央公民館
絵金蔵
絵金資料館
NPO法人高知こどもの図書館
NPO法人四国自然史科学研究センター
香美市立美術館
香美市立やなせたかし記念館※
香美市立吉井勇記念館
高知県立足摺海洋館
高知県立坂本龍馬記念館※
高知県立図書館※
高知県立のいち動物公園
高知県立美術館※
高知県立文学館※
高知県立埋蔵文化財センター
高知県立牧野植物園
高知県立歴史民俗資料館※
高知市生涯学習課
高知市春野郷土資料館※
高知城懐徳館
高知女子大学・高知短期大学
　総合情報センター図書館
高知市立市民図書館
高知市立自由民権記念館※
高知市立龍馬の生まれたまち記念館
国際交流の館ジョン万ハウス
子どものための民具体験館
金剛頂寺霊宝館
佐川町立佐川地質館
佐川町立青山文庫
四万十町立美術館
定福寺豊永郷民俗資料館
定福寺宝物館
宿毛市立坂本図書館
宿毛市立宿毛歴史館
須崎市立図書館
竹林寺宝物館
土佐市立市民図書館
土佐豊永万葉植物園(定福寺)
土佐山内家宝物資料館※
中岡慎太郎館
中村時計博物館
平和資料館草の家
横倉山自然の森博物館
横山隆一記念まんが館※
龍河洞博物館
龍馬歴史館
わんぱーくこうちアニマルランド

個人会員

林　一将(古渓城)

こうちミュージアムネットワーク通信　第7号

■平成21(2009)年3月20日
■編　集　こうちミュージアムネットワーク企画調整部会
(県立坂本龍馬記念館／高知市立自由民権記念館／横山隆一記念まんが館／県立歴史民俗資料館)
■事務局　(財)高知県文化財団
■電　話　088-866-8013
■印　刷　川北印刷(株)